

日蓮大聖人御書全集

あきもとごしよ

秋元御書

新版
1457
ゝ
1467

あきもとごうしよ

秋元御書

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

あきもとたろう

弘安 3 年 ('80)

1 月 27 日

59 歳

秋元太郎

つつごきいちぐつ

さんじゅう

さかずきつ

ろくじゅう

筒御器一具付れたり三十、ならびに盞付れたり六十、

おく た そうら お

送り給ひ候い畢わんぬ。

ごき もう

よ そうろう

御器と申すは、うつわものと読み候。

だいち 凹

みず溜

せいてんきよ

つきす

つきい

大地くぼければ水たまる。青天浄ければ月澄めり。月出で

みずきよ

あめふ

そうもくさか

うつわ

だいち

ぬれば水浄し。雨降れば草木昌えたり。器は大地のくぼき

みず

いけ

みず

い

つき

かげ

う

がごとし。水たまるは池に水の入るがごとし。月の影を浮か

ほけきよう

われ

み

い

たも

ぶるは法華経の我らが身に入らせ給うがごとし。

うつわ よつ とが いち ふく もう 覆
器に四つの失あり。一には覆と申して、うつぶけるなり、

またはくつがえす、または蓋をおおうなり。二には漏と申し

て、水もるなり。三には汚と申して、けがれたるなり。水浄

けれども、糞の入りたる器の水をば用いることなし。四に

は雑なり。飯に、あるいは糞、あるいは石、あるいは沙、

あるいは土ななどを雑えぬれば、人食らうことなし。

器は我らが身心を表す。我らが心は器のごとし。口も

器、耳も器なり。法華經と申すは仏の智慧の法水を我ら

が心に入れぬれば、あるいは打ち返し、あるいは耳に聞か

じと左右の手を二つの耳に覆い、あるいは口に唱えじと吐
き出だしぬ。譬えば、器を覆するがごとし。

あるいは少し信ずるようなれども、また悪縁に値つて

信心うすくなり、あるいは打ち捨て、あるいは信ずる日は

あれども捨つる月もあり。これは水の漏るるがごとし。

あるいは法華經を行ずる人の、一口は南無妙法蓮華經、

一口は南無阿弥陀仏なんど申すは、飯に糞を雜え、沙・石を

入れたるがごとし。法華經の文に「ただ樂つて大乘經典を

受持するのみにして、乃至、余經の一偈をも受けざれ」等

と

せけん がくしょう ほけきよう よぎよう まじ

と説くはこれなり。世間の学匠は法華經に余行を雜えても

くる おも にちれん おも そうら きようもん

苦しからずと思えり。日蓮もさこそ思い候えども、經文は

たと きさき だいおう たね はら たみ

しからず。譬えば、后の大王の種子を妊めるが、また民と

嫁 おうしゆ みんな ま てん かご うじがみ しゆご

とつげば、王種と民種と雜じつて天の加護と氏神の守護と

す くによぶ えん ちちふたり い きた おう

に捨てられ、その国破るる縁となる。父二人出で来れば、王

たみ にんぴにん

にもあらず、民にもあらず、人非人なり。

ほけきよう だいじ もう しゆ じゆく だつ ほうもん

法華經の大事と申すはこれなり。種・熟・脱の法門、

ほけきよう かんじん さんぜじつぼう ほとけ かなら みようほうれんげきよう

法華經の肝心なり。三世十方の仏は、必ず妙法蓮華經の

ごじ たね ほとけ な たま なむ あみだぶつ ぶつしゆ

五字を種として仏に成り給えり。南無阿弥陀仏は仏種には

あらず。真言・五戒等も種ならず。能く能くこのことを習しんごん ごかいとう たね よ よい

給たまうべし。これは雑ぞうなり。

この覆・漏・汚・雑ふく ろ う ぞう よつ とが はな そうろううつわ かんきの四つの失を離れて候 器をば完器もう 全 うつわ ほり 堤 も みずう

と申して、まつたき器なり。塹しんじん まつた びようどうだい え ちすいかわつつみ漏らざれば、水失す
ることなし。信心のこころ全ければ、平等大慧の智水乾く

ことなし。

今この筒の御器は、固く厚く候上、漆淨く候えば、
いま つつ ごき かた あつ そうろううえ うるしきよ そうら

法華經の御信力の堅固なることを顕し給うか。
ほけきよう ごしんりき けんご あらわ たも

毘沙門天は仏に四つの鉢を進らせて、四天下第一の福天
びしゃもんてん ほとけ よつ はち まい してんげだい いち ふくてん

いと云われ給う。い たも 浄徳夫人は雲雷音王仏に八万四千の鉢をじようとくぶにん うんらいおんのうぶつ はちまんしせん はち

供養し進らせて、妙音菩薩と成り給う。今、法華経に筒御器くよう まい みようおんぼさつ な たも いま ほけきよう つつごき

三十・盞六十進らせて、いかでか仏に成らせ給わざるさんじゅう さかずきろくじゅうまい ほとけ な たま

べき。

そもそも、日本国と申すは十の名あり。扶桑・野馬台・にほんこく もう じゅう な ふそう やまと

水穂・秋津洲等なり。別しては六十六箇国・島二つ。長さみずほ あきつしまとう べつ ろくじゅうろつかこく しまふた なが

三千余里。広さは不定なり、あるいは百里、あるいは五百里さんぜんより ひろ ふじよう ひやくり ごひやくり

等。五畿七道、郡は五百八十六、郷は三千七百二十九、田とう ごきしちどう こおり こひやくはちじゅうろく ごう さんぜんしちひやくにじゅうく た

の代は上田一万一千一百二十町、乃至八十八万五千五百しろ じようでんいちまんいつせんいつびやくにじつちよう ないしはちじゅうはちまんごせんごひやく

ろくじゅうしちちよう

にんずう

しじゅうくおくはちまんくせんろつぴやくごじゅうはちにん

六十七町。

人数は四十九億八万九千六百五十八人なり。

じんじゃ

さんぜんいつぴやくさんじゅうにしや

てら

いちまんいつせんさんじゅうしちしよ

なん

神社は三千一百三十二社、寺は一万一千三十七所、男は

じゅうくおくくまん

しせんはつぴやくにじゅうはちにん

によ

にじゅうくおくくまんしせん

十九億九万四千八百二十八人、女は二十九億九万四千

はつぴやくさんじゅうにん

なん

なか

にちれん

だいいち

もの

八百三十人なり。その男の中に、ただ日蓮、第一の者な

なにごと

だいいち

なんによ

にく

だいいち

もの

り。何事の第一とならば、男女に悪まれたる第一の者なり。

ゆえ

にほんこく

くにおお

ひととお

こころ

その故は、日本国に国多く人多しといえども、その心

いちどう

なむあみだぶつ

くち遊

あみだぶつ

ほんぞん

一同に南無阿弥陀仏を口ずさみとす。阿弥陀仏を本尊とし、

くほう

きら

さいほう

ねが

ほけきよう

ぎよう

ひと

九方を嫌って西方を願う。たとい法華經を行ずる人も、

しんごん

おこな

ひと

かい

たも

もの

ちしや

ぐにん

よぎよう

真言を行う人も、戒を持つ者も、智者も、愚人も、余行を

ぼう ねんぶつ しょう つみ け はかりごと みようごう ゆえ

傍として念仏を正とし、罪を消さん 謀 は名号なり。故

に、あるいは六万・八万・四十八万返、あるいは十返・百返・

せんべん

千返なり。

にちれんいちにん あみだぶつ むけん ごう ぜんしゅう てんま

しかるを、日蓮一人「阿弥陀仏は無間の業、禪宗は天魔

しよい しんごん ぼうこく あくほう りつしゅう じさいとう こくぞく

の所為、真言は亡国の悪法、律宗・持斎等は国賊なり」と

もう ゆえ かみいちにん しもばんみん いた ふぼ かたき しゆくせ

申す故に、上一人より下万民に至るまで、父母の敵、宿世

かたき むほん よう べいとう おそ

の敵、謀叛・夜討ち・強盗よりも、あるいは畏れ、あるい

いか の いか う そし もの

は瞋り、あるいは詈り、あるいは打つ。これを訾る者には

しよりよう あた ほ もの うち い

所領を与え、これを讃むる者をばその内を出だし、あるい

かりよう

ひ

せつがい

もの

ほうび

うえ

は過料を引かせ、殺害したる者をば褒美なんどせらるる上、

りようど

ごかんき

こうむ

両度まで御勘気を蒙れり。

とうせいだいいち

ふしぎ

もの

にんのうくじゅうだい

ぶつぼう

当世第一の不思議の者たるのみならず、人王九十代、仏法

わた

しちひやくよねん

ふしぎ

もの

渡つては七百余年なれども、かかる不思議の者なし。

にちれん

ぶんえい

だいすいせい

にほんこく

むかし

な

てんぺん

日蓮は文永の大彗星のごとし、日本国に昔より無き天変

にちれん

しょうか

おおじしん

あきつしま

はじ

ちよう

なり。日蓮は正嘉の大地震のごとし、秋津洲に始めての地天

なり。

にほんこく

よはじ

むほん

ものにじゅうろくにん

だいいち

日本国に代始まつてよりすでに謀叛の者二十六人。第一

おおやまのみこ

だんに

おおいしのやままる

ないし

だいにじゅうごにん

よりとも

は大山王子、第二は大石山丸、乃至、第二十五人は頼朝、

だいにじゅうろくにん よしとき

にじゅうしにん

ちよう

せ

たてまつ

第二十六人は義時なり。二十四人は朝に責められ奉り、

ごくもん

くび

か

さんや

むくろ

さら

ににん

おうい

かたむ

獄門に首を懸けられ、山野に骸を曝す。二人は王位を傾け

たてまつ

こくちゆう

て

にぎ

おうぼうすで

つ

ひとびと

奉り、国中を手を奉る。王法既に尽きぬ。これらの人々

にちれん

ばんにん

にく

す

も、日蓮が万人に悪まるるには過ぎず。

よし

たず

ほけきよう

もつと

だいいち

もん

その由を尋ねれば、法華経には「最も第一なり」の文あ

こうぼうだいし

ほつけ

もつと

だいさん

じかくだいし

り。しかるを、弘法大師は「法華は最も第三なり」、慈覚大師

ほつけ

もつと

だいに

ちしようだいし

じかく

いま

は「法華は最も第二なり」、智証大師は慈覚のごとし。今、

えいざん

とうじ

おんじようじ

しよそう

ほけきよう

む

ほつけ

もつと

叡山・東寺・園城寺の諸僧、法華経に向かつては「法華は最

だいいち

よ

ぎ

だいに

だいさん

よ

も第一なり」と読めども、その義をば「第二」「第三」と読む

なり。公家くげと武家ぶけとは子細しさいは知ろしめさねども、御帰依ごきえの

こうそうとうみな

ぎ

しだんいちどう

ぎ

ほか

ぜんしゅう

高僧等皆この義なれば、師檀一同の義なり。その外、禪宗

きょうげ

べつでん

うんぬん

ほけきょう

べつじよ

ことば

ねんぶつしゅう

は「教外に別伝す」云々。法華經を蔑如する言なり。念仏宗

せん

なか

ひと

な

いちにん

う

ものあ

は「千の中に一りも無し」「いまだ一人も得る者有らず」

もう

こころ

ほけきょう

ねんぶつ

たい

あ

うしな

ぎ

と申す。心は法華經を念仏に對して挙げて失う義なり。

りつしゅう

しやうじやう

しやうほう

とき

ほとけゆる

たも

律宗は小乗なり。正法の時すら仏免し給うことなし。

まつぼう

ぎやう

こくしゆ

おうわく

たてまつ

いわんや、末法にこれを行じて国主を誑惑し奉るをや。

だつき

ばつき

ほうじ

さんによ

さんおう

たぶら

よ

うしな

姐己・妹喜・褒姒の三女が三王を誑かして代を失いしが

あくほうくに

るふ

ほけきょう

うしな

ゆえ

ごとし。かかる惡法国に流布して法華經を失う故に、

あんどく たかひらとう だいおう てんしょうだいじん しょうはちまん す たま

安德・尊成等の大王、天照太神・正八幡に捨てられ給い

て、あるいは海に沈み、あるいは島に放たれ給い、相伝の

しよじゅうとう かたむ たま てん す たも ゆえ

所従等に傾けられ給いしは、天に捨てられさせ給う故ぞ

かし。

ほけきよう おんかたき ごきえあ し ひと

法華經の御敵を御帰依有りしかども、これを知る人なけ

とが し ちじん き し じゃ みずか

れば、その失を知ることもし。智人は起を知り、蛇は自

じゃ し

ら蛇を識る」とは、これなり。

にちれん ちじん じゃ りゅう ころ し からす

日蓮は智人にあらざれども、蛇は竜の心を知り、鳥の

よ きつきよう はか かんが え

世の吉凶を計るがごとし。このことばかりを勘え得て

そろう

もう

しゆゆ とが あ

候なり。このことを申すならば、須臾に失に当たるべし。

もう

だいあびじごく お

申さずんば、また大阿鼻地獄に墮つべし。

ほけきよう

なら

みつ

ぎ

いち

ぼうにん

しやういびく

法華經を習うには三つの義あり。一には謗人。勝意比丘・

くがんびく

むくろんじ

だいまんばらもんとう

かれ

さんね

苦岸比丘・無垢論師・大慢婆羅門等がごとし。彼らは三衣を

み

まと

いっぱつ

まなこ

あ

にひやくごじっかい

かた

たも

身に纏い、一鉢を眼に当て、二百五十戒を堅く持って、し

だいじよう

しゆうてき

な

むけんだいじよう

お

いま

にほん

かも大乘の讐敵と成って無間大城に墮ちにき。今の日本

こく

こうぼう

じかく

ちしようとう

じかい

かれ

ちえ

国の弘法・慈覚・智証等は、持戒は彼らがごとく、智慧は

か

びく

こと

だいにちきやうしんごんだいいち

また彼の比丘に異ならず。ただし、「大日經真言第一、

ほけきやうだいに

だいさん

もう

ひやくせん

ひと

にちれん

もう

法華經第二・第三」と申すこと、百千に一つも日蓮が申す

むけんたいじよう

もう

ようならば、無間大城にやおわすらん。このことは申すも

おそ

か　　つ

おも　　そうら

恐れあり。まして書き付くるまではいかんと思ひ候えども、

ほけきよう　　もつと　　だいいち

と　　そうろう

に

「法華経は最も第一なり」と説かれて候に、これを「二」

さん　　とう　　よ　　ひと　　き

ひと　　おそ　　くに　　おそ　　もう

「三」等と読まん人を聞いて、人を恐れ国を恐れて申さず

すなわ　　かれ　　あだ

もう　　いつさいしゆじよう　　だいおんてき

んば、「即ちこれ彼が怨なり」と申して、一切衆生の大怨敵

よし　　きよう　　しゃく

載

そうら　　もう　　そうろう

なるべき由、経と釈とにのせられて候えば、申し候な

ひと　　おそ　　よ　　はばか

い　　われ　　しんみよう　　あい

り。人を恐れず、代を憚らず云うこと、「我は身命を愛せ

むじようどう

お

もう

ず、ただ無上道を惜しむのみ」と申すはこれなり。

ふきようぼさつ　　あつく　　じようしゃく

たじ

せけん　　おそ

不軽菩薩の悪口・杖石も他事にあらず。世間を恐れざ

ほけきよう　せ　ねんご

れい

るにあらず。ただ法華經の責めの苦ろなればなり。例せば、

すけなり　ときむね　たいしようどの　じん　うち　えら　かたき　こい

祐成・時致が大將殿の陣の内を簡ばざりしは、敵の恋し

はじ　かな　ゆえ　ぼうにん

く恥の悲しかりし故ぞかし。これは謗人なり。

ぼうけ　もう　いちご　あいだほけきよう　ぼう　ちゅうや

謗家と申すは、すべて一期の間法華經を謗ぜず昼夜

じゅうにとき　ぎよう　ぼうけ　う　かなら　むけんじごく

十二時に行ずれども、謗家に生まれぬれば必ず無間地獄

お　れい　しょういびく　くがんびく　いえ　う

に墮つ。例せば、勝意比丘・苦岸比丘の家に生まれて、あ

でし　な　だんな　な　もの　こころ

るいは弟子と成り、あるいは檀那と成りし者どもが、心な

むけんじごく　お

らず無間地獄に墮ちたる、これなり。

たと　よしもり　かた　もの　いくさ　もの　お　はら

譬えば、義盛が方の者、軍をせし者はさて置きぬ、腹の

うち あ こ う ま は は ら さ
内に有りし子も、産むを待たれず母の腹を裂かれしがごと
いま にちれん もう こうぼう じかく ちしよう さんだいし ほけきよう
し。今、日蓮が申す弘法・慈覚・智証の三大師の、法華経を
まさ むみよう へんいき こもう ほう か そうろう
正しく「無明の辺域、虚妄の法」と書かれて候は、もし
ほけきよう もんまこと えいざん とうじ おんじようじ しちだいじ にほん
法華経の文実ならば、叡山・東寺・園城寺・七大寺、日本
いちまんいつせんさんじゅうしちしよ てらでら そう そうら
一万一千三十七所の寺々の僧はいかんが候わんずらん。
せんれい むけんだいじよううたが ほうけ
先例のごとくならば、無間大城疑いなし。これは謗家な
り。

ぼうこく もう ほうぼう もの くに じゅう
謗国と申すは、謗法の者その国に住すれば、その一国皆
むけんだいじよう たいかい いっさい みずあつ くに
無間大城になるなり。大海へは一切の水集まり、その国は

いっさい わざわ あつ
一切の禍い集まる。

たと やま そうもく しげ

さんさいつきづき かさ

譬えば、山に草木の滋きがごとし。三災月々に重なり、

しちなん ひび きた けかちおこ

くにが きどう へん やくびよう

七難日々に来る。飢渴発れば、その国餓鬼道と変じ、疫病

かさ くにじごくどう

いくさお くにしゆら

重なれば、その国地獄道となる。軍起れば、その国修羅

どう へん ふぼ きようだい しまい

えら め おとこ たの

道と変ず。父母・兄弟・姉妹をば簡ばず妻とし夫と憑め

くにちくしやうどう

し さんあくどう お

ば、その国畜生道となる。死して三惡道に墮つるにはあら

げんしん くに しあくどう へん

ぼうこく もう

ず、現身にその国四惡道と変ずるなり。これを謗国と申す。

れい だいしやうこんぶつ まつぼう ししおんのうぶつ じよくせ ひとびと

例せば、大莊嚴仏の末法、師子音王仏の濁世の人々のご

ほうおんきやう と

そうろう そうろう かこ

とし。また報恩経に説かれて 候がごとくんば、過去せる

ふぼ きようだい しまい いっさい ひと し じき
父母・兄弟・姉妹・一切の人の死せるを食し、また生きた

じき いま にほんこく
るを食す。今、日本国またまたかくのごとし。真言師・

ぜんしゆう じさいとう ひと じき もの こくちゆう じゆうまん
禅宗・持斎等の、人を食する者、国中に充満せり。これ

しんごん じゃほう ことお りゆうぞうぼう ひと く
ひとえに真言の邪法より事起これり。竜象房が人を食らい

まん ひと あらわ かけ なら ひと にく
しは万が一つ顕れたるなり。彼に習つて人の肉を、あるい

ちよろく まじ ぎよちよう き まじ 叩
は猪鹿に交え、あるいは魚鳥に切り雑え、あるいはたたき

くわ 飯 う じき ものかず し みな
加え、あるいはすしとして売る。食する者数を知らず。皆、

てん す しゆご ぜんじん はな ゆえ けつく
天に捨てられ、守護の善神に放されたるが故なり。結句は、

くにたこく せ じこく 同士 う くにへん
この国他国より責められ、自国どし打ちして、この国変じ

むけんじごく な
て無間地獄と成るべし。

にちれん おお とが か み ゆえ よどうざい とが のが
日蓮、この大いなる失を兼ねて見し故に、与同罪の失を脱

ほとけ かしやく おも ゆえ ちおん ほうおん
れんがため、仏の呵責を思うが故に、知恩・報恩のため、

くに おん ほう おも こくしゆ いっさいしゆじよう つ し
国の恩を報ぜんと思つて、国主ならびに一切衆生に告げ知

らしめしなり。

ふせつしようかい もう いっさい しゃかい なか だいいち ごかい はじ
不殺生戒と申すは一切の諸戒の中の第一なり。五戒の初

ふせつしようかい はっかい じっかい にひやくごじっかい ごひやつかい ぼんもう
めにも不殺生戒、八戒・十戒・二百五十戒・五百戒・梵網の

じゆうじゆうごんかい けごん じゆうむじんかい ようらくきよう じっかいとう はじ
十重禁戒・華嚴の十無尽戒・璎珞經の十戒等の初めには

みな ふせつしようかい じゆか さんぜん いまし なか たいへき
皆、不殺生戒なり。儒家の三千の禁めの中にも大辟こそ

だいいち

そうら

ゆえ

さんぜんかい

へんまん

しんみよう

あた

第一にて候え。その故は「三千界に遍満するも、身命に直

あ

もう

さんぜんせかい

み

ちんぼう

するもの有ることなし」と申して、三千世界に満つる珍宝な

いのち

か

ありのこ

ころ

もの

じごく

れども、命に替わることはなし。蟻子を殺す者なお地獄に

お

ぎよちようとう

あおくさ

き

もの

じごく

お

墮つ。いわんや魚鳥等をや。青草を切る者なお地獄に墮つ。

しが

き

もの

じゆうかい

いわんや死骸を切る者をや。かくのごとき重戒なれども、

ほけきよう

かたき

な

がい

だいいち

くどく

と

たも

法華經の敵に成れば、これを害するは第一の功德と説き給

くようの

うなり。いわんや、供養を展ぶべけんや。

ゆえ

せんよこくおう

ごひやくにん

ほつし

ころ

かくとくびく

むりよう

故に、仙予国王は五百人の法師を殺し、覺徳比丘は無量の

ほうぼう

もの

ころ

あいくだいおう

じゆうまんはつせん

げどう

ころ

たま

謗法の者を殺し、阿育大王は十万八千の外道を殺し給いき。

こくおう

びくとう

えんぶだいいち

けんおう

じかいだいいち

これらの国王・比丘等は、閻浮第一の賢王、持戒第一の

ちしや

せんよこくおう

しゃかぶつ

かくとくびく

かしようぶつ

あいくだいおう

智者なり。仙予国王は釈迦仏、覺徳比丘は迦葉仏、阿育大王

とくどう

じん

いま

にほんこく

じかい

は得道の仁なり。今、日本国もまたかくのごとし。持戒・

はかい

むかい

おうしん

ばんみん

ろん

いちどう

ほけきようひぼう

くに

破戒・無戒、王臣・万民を論ぜず、一同の法華経誹謗の国な

み

かわ

剥

ほけきよう

か

たてまつ

にく

つ

り。たとい身の皮をはぎて法華経を書き奉り、肉を積ん

くよう

たも

かなら

くに

ほろ

み

じごく

お

たも

で供養し給うとも、必ず国も滅び、身も地獄に堕ち給うべ

おお

とが

しんごんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんしゅう

じさいとう

き大いなる科あり。ただ真言宗・念仏宗・禅宗・持斎等

み

いまし

ほけきよう

寄

の身を禁めて法華経によせよ。

てんだい

ろくじっかん

そら

う

こくしゅうとう

ちじん

おも

天台の六十巻を空に浮かべて国主等には智人と思われた

ひとびと

ち およ

し よ

る人々の、あるいは智の及ばざるか、あるいは知れども世を

おそ

ゆえ

しんごんしゅう

褒

ねんぶつ

恐るるかの故に、あるいは真言宗をほめ、あるいは念仏・

ぜん

りつとう どう

かれ

たいか

ひやくせんこ

そうろう

れい

禪・律等に同ずれば、彼らが本科には百千超えて候。例

しげよし

よしむらとう

じおんだいし

げんざんじっかん

つく

せば、成良・義村等がごとし。慈恩大師は玄賛十巻を造つ

ほけきよう

ほ

じごく

お

ひと

たいそうこうてい

おんし

て、法華経を讃めて地獄に墮つ。この人は太宗皇帝の御師、

げんじようさんどう

じようそく

じゅういちめんかんのん

ごしん

もう

こえ

玄奘三蔵の上足、十一面観音の後身と申すぞかし。音は

ほけきよう

に

こころ

にぜん

きよう

どう

ゆえ

かじよう

法華経に似たれども、心は爾前の経に同ずる故なり。嘉祥

だいし

ほつけげんじっかん

つく

すで

むけんじごく

お

大師は法華玄十巻を造つて、既に無間地獄に墮つべかりし

ほけきよう

よ

う

す

てんだいだいし

つか

が、法華経を読むことを打ち捨てて天台大師に仕えしかば、

じごく　く　のが　たま
地獄の苦を脱れ給いき。

いま　ほつけしゅう　ひとびと

今、法華宗の人々もまたかくのごとし。比叡山は法華経の

ひえいざん　ほけきよう

ごじゅうしよ　にほんこく　いちじよう　ごしよりよう

御住所、日本国は一乗の御所領なり。しかるを、慈覚大師

じかくだいし

ほけきよう　ざす　うば　と　しんごん　ざす

さんぜん

は法華経の座主を奪い取って真言の座主となし、三千の

だいしゆ　しよじゅう　な　こうぼうだいし　ほつけしゅう　だんな

大衆もまたその所従と成りぬ。弘法大師は法華宗の檀那に

おわ　さ　がてんのう　うば　と　だいり　しんごんしゅう　てら

て御坐します嵯峨天皇を奪い取って、内裏を真言宗の寺と

な　あんとくてんのう　みよううんざす　し　よりとものあそん　じようぶく

成せり。安徳天皇は明雲座主を師として頼朝朝臣を調伏

たま　うだいししょうどの　ばつ

せさせ給いしほどに、右大将殿に罰せらるるのみならず、

あんとく　さいかい　しず　みよううん　よしなか　ころ　たま　たかひらおう

安徳は西海に沈み、明雲は義仲に殺され給いき。尊成王は、

てんだいぎす じえんそうじよう とうじ おむろ しじゅういちにん こうそう

天台座主の慈円僧正、東寺、御室ならびに四十一人の高僧

とう しょうげ たてまつ だいいり だいだん た よしときうきようのごんのだいぶどの

等を請下し奉り、内裏に大壇を立てて義時右京権大夫殿

じようぶく

しちにち

もう

ろくがつじゅうよつか

らくようやぶ

を調伏せしほどに、七日と申せし六月十四日に洛陽破れて、

おう おきのくに

さどがしま うつ

ざす

おむろ

王は隠岐国あるいは佐渡島に遷され、座主・御室は、ある

せ

おも

じ

し

たま

せけん

ひとびと

いは責められ、あるいは思い死にに死に給いき。世間の人々、

こんげん

し

ほけきよう

だいにちきよう

この根源を知ることなし。これひとえに法華経・大日経の

しょうれつ

まよ

ゆえ

勝劣に迷える故なり。

いま

にほんこく

だいもうここく

せ

え

か

ふきつ

ほう

今もまた、日本国、大蒙古国の責めを得て、彼の不吉の法

ごじようぶく

おこな

うけたまわ

につきふんみよう

をもつて御調伏を行わると承る。また日記分明なり。

このことを知らん人、いかでか歎かざるべき。

かな

われ ひぼうしようほう くに う

だいく あ

悲しいかな、我ら誹謗正法の国に生まれて大苦に値わん

ぼうしん のが

ぼうけ ぼうこく とが

ことよ。たとい謗身は脱るというとも、謗家・謗国の失い

ぼうけ とが のが おも

ふぼ きようだいとう

かんせん。謗家の失を脱れんと思わば、父母・兄弟等にこ

かた もう

にく

しん

のことを語り申せ。あるいは悪まるるか、あるいは信ぜさ

ぼうこく とが のが おも

こくしゅ かんぎよう

せまいらするか。謗国の失を脱れんと思わば、国主を諫曉

たてまつ

しがい るざい おこな

われ しんみよう

し奉つて、死罪か流罪かに行わるべきなり。「我は身命

あい

むじようどう お と

み かる

を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」と説かれ、「身は軽く

ほう おも

み ころ ほう ひろ しやく

法は重し。身を死して法を弘む」と釈せられしは、これな

り。

か こ おんのんごう

いま ほとけ な

過去遠々劫より今に仏に成らざりけることは、かようの

おそ

い い

ゆえ

みらい

ことに恐れて云い出ださざりける故なり。未来もまたまた

いま

にちれん

み

あ

抓

し

かくのごとくなるべし。今、日蓮が身に当たつてつみ知ら

そうろう

し

でしとう

なか

とうせい

せ

れて候。たといこのことを知る弟子等の中にも、当世の責

恐

もう

つゆ

み

き

がた

めのおそろしさと申し、露の身の消え難きによつて、ある

お

こころ

しん

左 右

いは落ち、あるいは心ばかりは信じ、あるいはところす。

おんきよう

もん

なんしんなんげ

と

そうろう

み

あ

御経の文に「難信難解」と説かれて候が、身に当たつて

たつと

おぼ

そうろう

ぼう

ひと

だいちみじん

しん

ひと

貴く覚え候ぞ。謗ずる人は大地微塵のごとし。信ずる人

そうじよう ど

は爪上の土のごとし。 謗ずる人は大海、進む人は一涸。

てんだいさん りゆうもん もう ところ

たきひやくじよう

はる はじ

天台山に竜門と申す所あり。その滝百丈なり。春の始

うおあつ

たき のぼ

ひやくせん

ひと

のぼ

うお

めに魚集まつてこの滝へ登るに、百千に一つも登る魚は

りゆう な

たき はや

や

す

でんこう

す

竜と成る。この滝の早きこと、矢にも過ぎ、電光にも過ぎ

のぼ

うえ

はる

はじ

たき

ぎよふあつ

うお

たり。登りがたき上に、春の始めにこの滝に漁父集まつて魚

と

あみ

か

ひやくせんじゆう

い

と

を取る。網を懸くること百千重、あるいは射て取り、あ

く

と

わし

くまたか

とび

ふくろう

とら

おおかみ

いぬ

きつね

るいは酌んで取る。鷺・鵠・鴟・梟・虎・狼・犬・狐

あつ

ちゆうや

と

く

じゆうねんにじゆうねん

ひと

りゆう

集まつて昼夜に取り噉らうなり。十年二十年に一つも竜

うお

となる魚なし。

例せば、凡下の者の昇殿を望み、下女が后と成らんと

するがごとし。法華經を信ずること、これにも過ぎて候と

思しめせ。

常に仏禁めて言わく、いかなる持戒、智慧高く御坐し

まして一切經ならびに法華經を進退せる人なりとも、

法華經の敵を見て、責め罵り国主にも申さず、人を恐れて

黙止するならば、必ず無間大城に墮つべし。譬えば、我は

謀叛を發さねども、謀叛の者を知つて国主にも申さねば、与

同罪は彼の謀叛の者のごとし。南岳大師云わく「法華經の讐

をみ見て呵責せざる者はかしやく謗法の者なり。もの無間地獄の上にほうぼう堕ち

ん」と。み見て申さぬ大智者は、もう無間の底にだいちしや堕ちて、彼の地獄

の有らん限りはあ出さかぎずべからず。

にちれん日蓮、この禁めを恐るる故にいまし国中を責めておそ候ほどに、ゆえ

一度ならず流罪・死罪に及びぬ。いちど今は罪も消え、るざい過も脱れ

なんと思つて、おも鎌倉を去つてこの山に入つて七年なり。かまくら

この山の為体、やま日本国の中には七道あり。ていたらく七道の内に

東海道十五箇国、とうかいどうじゅうごこくその内に甲州の飯野御牧の三箇郷の内、うち

波木井と申すこの郷の内、はきい戊亥の方に入つて二十余里の深

はきいもうごううちいぬいかたいにじゅうよりしん

山あり。北は身延山、南は鷹取山、西は七面山、東は天子山

いた　しまい　衝　た

そと　めぐ　よつ

なり。板を四枚つい立てたるがごとし。この外を回つて四つ

かわ

きた

みなみ

ふじかわ

にし

ひがし

はやかわ

うし

の河あり。北より南へ富士河、西より東へ早河、これは後

まえ

にし

ひがし

は　き　い　が　わ

なか

ひと

たき

ろなり。前に西より東へ波木井河の中に一つの滝あり。

みのぶがわ

な

ちゆうてんじく

じゆぶせん

ところ

うつ

身延河と名づけたり。中天竺の鷲峰山をこの処へ移せる

かんど

てんだいさん

きた

おぼ

か、はたまた漢土の天台山の来れるかと覚ゆ。

しぎん　しが

なか

て

ひろ

ほど

たい

ところ

この四山四河の中に手の広さ程の平らかなる処あり。こ

あんじち

むす

てんう

のが

き

かわ

剥

しへき

こに庵室を結んで天雨を脱れ、木の皮をはぎて四壁とし、

じし

しか

かわ

ころも

はる

わらび

お

み

やしな

あき

自死の鹿の皮を衣とし、春は蕨を折つて身を養い、秋は

このみ ひろ いのち ささ そうら

こぞじゆういちがつ

果を拾つて命を支え候いつるほどに、去年十一月より

ゆきふ っ あらた とし しょうがつ いま た

雪降り積んで、改まる年の正月、今に絶ゆることなし。

あんじち しちしやく ゆき いちじよう しへき こおり かべ のき 氷 柱

庵室は七尺、雪は一丈、四壁は氷を壁とし、軒のつらら

どうじようしようこん ようらく たま に うち ゆき こめ っ もと

は道場莊嚴の瓔珞の玉に似たり。内には雪を米と積む。本

ひと きた うえ ゆきふか みちふさ と ひと ところ

より人も来らぬ上、雪深くして道塞がり、問う人もなき処

げんざい はっかんじごく ごう み 償

なれば、現在に八寒地獄の業を身につぐのえり。生きなが

ほとけ な かんくちよう もう とり あいに

ら仏には成らずして、また寒苦鳥と申す鳥にも相似たり。

こうべ そ 鶉 ころも こおり 閉

頭は剃ることなければ、うずらのごとし。衣は氷にとじ

おし はね こおり むす

られて、鴛鴦の羽を氷の結べるがごとし。

ところ

いにしえむつ

ひと

と

でしとう

す

かかる処へは、古昵びし人も問わず、弟子等にも捨て

そうら

ごき

たま

ゆき

も

はん

られて候いつるに、この御器を給わつて、雪を盛つて飯と

かん

みず

の

濃

漿

おも

こころざし

おも

観じ、水を飲んでこんずと思う。志のゆくところ、思い

や

たま

もう

そうろう

きようきようきんげん

遣らせ給え。またまた申すべく候。恐々謹言。

こうあんさんねんしょうがつにじゅうしちにち

にちれん

かおう

弘安三年正月二十七日

日蓮

花押

あきもとたろうひょうえどのごへんじ

秋元太郎兵衛殿御返事